

## F. Cizek の美術教育に関する調査・研究(1)

茂木 一 司\*・石 崎 和 宏\*\*

(1988年10月15日 受理)

### A Research on Art Education of Franz Cizek (1)

Kazuji MOGI\* and Kazuhiro ISHIZAKI\*\*

#### 1 はじめに

本研究は、創造主義美術教育のパイオニアであり、戦後の民間教育運動（創美）を通じて、わが国の美術教育に多大な影響を与え、現在でもその美術教育理念を支えるオーストリアの美術教育家フランツ・チゼック（Franz Cizek, 1865～1946）の美術教育理論および実践に関する調査・研究である。研究の動機は、茂木が美術教師教育を検討する際、小学校教員養成課程いわゆる美術非専門学生的美術教育の導入教育として、担当講義「美術科教育」（これは「教職専門科目」であり、通常の免許科目名としては「図工教材研究」と「美術科教育法」を合わせた科目である）の期末試験に課していたW. ヴィオラ著『チゼックの美術教育』（Wilhelm Viola: Child Art, University of London Press Ltd. London, 1942 久保貞次郎・深田尚彦訳 黎明書房 1976年）の感想文レポートを分析した<sup>(1)</sup>のがその発端となっており、石崎が1987年のINSEA ハンブルグ大会出席の際にウィーンに立ち寄り、1985年にウィーン市立歴史博物館で開催された「フランツ・チゼック—美術教育開拓者—1865～1946」展（6.20～11.3）のカタログ<sup>(2)</sup>を入手し、その後の詳細な文献検索を経て、本年8月から9月にかけて再度ウィーンに資料収集に出かけた成果が基本となっている。

チゼックの人気の秘密とは何か？なぜ人々の支持を得るのか？本研究の直接の動機は、このチゼックの人気の解明にその端を発している。チゼックの日本におけるまとまった紹介が友人のヴィオラによる（本人が書いたものではない）『Child Art』をほとんど唯一とするにもかかわらず、わが国の美術教育界におけるチゼックへの圧倒的な支持はみのがせないものがあるように思われる。チゼックの研究とは、単に歴史的事実の研究にとどまらず、美術教育の本質に、そして現代の緊迫する教育問題そのものの解決に連なる重要な問題と捉えている。それは、著者が以前指摘した

---

\* 鹿児島大学教育学部美術科

\*\* 筑波大学大学院芸術学研究科

●表1 日本におけるフランツ・チゼックに関する文献年表

年 代	著 者	題 名	出 典	備 考
<b>【戦前】</b>				
1927 (昭2)	宮下 孝雄	チェツカ教授の教室から ーウキーン工芸学校の児童画ー《大正10年》	『私の観たる欧州美術館』東邦堂	『美育文化』第25巻1号に再掲載 31~32頁
1929 (昭4)	霜田 静志	欧米の美術教育9 オーストリー	『学校美術』12月号	未見
1936 (昭11)	石井 柏亭	欧米諸國に於ける近代の児童美術教育〈オーストリア〉	『現代教育學大系 各科学篇第17巻 美術教育論』成美書店 57~61頁	
<b>【戦後】</b>				
1923 (昭23)	外山卯三郎		『学校美術4』多色刷り4頁	未見
1949 (昭24)	ヴィオラ 久保貞次郎訳	『子供の絵はどう指導したらよいか』	自費出版	Child Art の第10章質疑 応答の部分訳
1951 (昭26)	トムリンソン 久保訳	『藝術家としての子供たち』	美術出版社 18~23頁	
1952 (昭27)	ヴィオラ	『美術教育と教師』	自費出版	未見. Child Art の第5 章教師の部分訳?
	久保貞次郎	児童美術のために	『みづゑ』544号 美術出版社 1~55頁	
	ヴィオラ	『創造主義美術教育への反駁』	自費出版	未見. Child Art の第11 章批判の部分訳?
	霜田 静志	幼児の絵の指導	竹田俊雄・霜田・久保共著『児童画の見方と指導』金子書房 27~104頁	
	宮武 辰夫	チゼックの児童アート・クラス	『幼児の絵は生活している』栗山書房 130~131頁	1978年に文化書房博文社から復刻
1953 (昭28)	勝見 勝	児童画の美学	『アトリエ』316号(6月号)アトリエ出版社 67~75頁	
1954 (昭29)	霜田 静志	オーストリアの美術教育	『現代世界学童美術全集』河出書房 20~21頁	
	ヴィオラ 庄司浅水訳	創造主義による児童美術についての諸問題	『美育文化』1月号25~30頁, 2月号26~30頁	Child Art の第11章批判の部分訳
1955 (昭30)	ヴィオラ 久保訳	子供の絵はどう指導したらよいか(改訂版) チゼック, フランツ	創美東京支社	
1956 (昭31)	霜田 静志	外国のようす〈チゼックの偉業〉	『造形教育大辞典』不昧堂書店 第三巻 1140頁 『教育講座 子どもの美術』美術出版社 101~104頁	
	勝見 勝 室 靖	美術教育の系譜(西洋) 現代美術教育の思潮〈創造的美術教育〉	『美術教育講座 原理編』金子書房 36~51頁, 69~79頁	

1958 (昭33)	リチャード ソン 稲村退三訳	『愛の美術教師』〈チ ゼック教授の求めたも の〉	白揚社 137~143頁	Marion Richrdson : Art and The Child, 1954, University of London Press., Ltd. の全訳 <sup>(4)</sup>
1960 (昭35)	霜田 静志	チゼックの児童画観 フランツ・チゼックと美 術教育 チゼックの偉業	『児童画の心理と教育』 金子書房81~86頁, 273~ 278頁, 309~315頁	
1961 (昭36)	久保貞次郎	チゼックと20世紀の美術 教育	『教育美術』第22巻7月 号 3~6頁	
1964 (昭39)	霜田 静志 久保貞次郎	美術教育の父フランツ・ チゼック チゼックと20世紀の美術 教育	『絵にみる子どもの心 理』東都書房 3~6頁 『児童画の世界』大日本 図書 82~92頁 創造美育協会	解説の他カラー図版3枚 『教育美術』第22巻7月号 の再掲載
1968 (昭43)	ヴィオラ 久保 訳 霜田 静志	子供の絵はどう指導した らよいか (改訂版)	『芸術及び芸術家の心 理』造形社	未見
1969 (昭44)	ヴィオラ 棚橋民子訳	子どもの美術とプリミテ ィブ・アート	『創造美育』冬季号	未見. Child Art の第2 章子どもの美術とプリミ ティブ・アートの部分訳?
1972 (昭47)	島崎 清海	フランツ・チゼックー子 供の絵を発見したー	『美育文化』第22巻8月号 22~23頁	
1975 (昭50)	熊本 高工 霜田 静志 馬客談 李英輔訳	チゼック回顧 フランツ・チゼックと児 童美術 チゼック・アート・クラ ス訪問記	『美育文化』第25巻1月号 30頁 同上 32~34頁 同上 34~40頁	霜田著『児童画の心理と 教育』から掲載 『百代美育』(台湾の美 術教育雑誌)1974年16号 から掲載
1976 (昭51)	ヴィオラ 久保・深田 尚彦訳	『チゼックの美術教育』	黎明書房	Wilhelm Viola: Child Art, University of London Press Ltd., 1942の全訳
1978 (昭53)	尾崎恵子	フランツ・チゼックの児 童画観についてー自由と 創造をめぐるー	『西南学院大学児童教育 学論集』第5巻1号 53 ~65頁	
1982 (昭57)	久保貞次郎 宮脇 理 宮脇 理	フランツ・チゼックの児 童画教育 主体は子どもの側にあり ーチゼックと山本鼎ー造 形教育の西と東ー 美術教育と児童の世紀ー フランツ・チゼックのシ ステムなきシステムー	『美術教育論ノート』開 隆堂出版 26~31頁 『実践造形教育大系 現 代子ども像と造形教育』 開隆堂出版 74~83頁 『教育美術』〈図解美術 教育史〉第43巻7月号 39頁	
1985 (昭60)	茂木 一司	チゼックの美術教育実践 について概説せよ	『美育科教育の基礎知識』 建帛社 27頁	

1986 (昭61)	茂木 一司 長田 謙一	美術教育と教師教育— 【チゼックの美術教育】 の感想文の分析を通して— フランツ・チゼックと20 世紀美術—ユーゲント シュティールからアバン ギャルドへ	筑波大学芸術教育学研究 誌『芸術教育学』第1号 42~72頁 『美育文化』第36巻9月 号 58~63頁
1988 (昭63)	石崎 和宏 遠藤 敏明 熊本 高工	芸術教育のパイオニア— フランツ・チゼック— 20世紀・児童画の誕生フ ランツ・チゼック フランツ・チゼックの偉 業	『教育美術』第49巻1月 号 24~26頁 『児童画の歴史』三晃書 房 18~25頁, 110~121 頁

ように、チゼックの偉業とは、「それが当時の社会の芸術領域と教育領域へ向けられたアンチテーゼであること、いわば美術と教育の両面に歴史的足跡を残す輝くエポックであったこと」であり、「つまり、その重要な点は美術のみ、教育のみに向けられたのではなく、両者が本質的・有機的に統合された形式、すなわち心理学よりも先に美術教育そのものの実践によりなされたことである。いいかえると、美術教育の在り方の視座が、美術教育史上初めて具体化された場面であった」<sup>(3)</sup>と捉える問題意識である。

本研究は、そのような意識を踏まえ、まずチゼック研究のために必要な正確な基礎資料作りを目的としている。それは、当然これからの分厚い美術教育研究のために不可欠の方法と思われ、本稿では、その第一報として、チゼックの日本への紹介・移入とその研究についての調査とチゼックの履歴を中心に報告したい。

## 2 日本におけるチゼックに関する資料

日本におけるチゼックの文献は、戦前ではわずかに三編が確認できるのみである。しかし、日本人のチゼック・スクールの訪問者をもっと多かつたらしい。ウィーン市庁舎の中にあるウィーン市立図書館に保存されているスクールの訪問記録名簿<sup>(5)</sup>に1930年に玉川学園の小原國芳（名簿には原國芳と記載）や田中千代（服飾家）<sup>(6)</sup>の名前が確認されており、その他にもかなりの日本人の訪問者があつたらしい。これに関しても引続き調査していくつもりである。

文献を年代の古い順に見ていくと、宮下孝雄（1905~1970）<sup>(7)</sup>のものは題名のとおり、チゼック・スクールの訪問記である。宮下の訪問記も他のそれと同様、チゼック・スクールの自由でのびのびとし、しかも熱心な子どもたちと適切な指導でそのすべてを包み込んでいるチゼックの様子をありありと描き出している。

「……チュツカ教授は暫く然かも熱心なる暗示に耳を傾けてからそれに対し、児童の創案を損傷しない程度に十分に可能性を与えるために一々答弁を与えた。すると勝手な話合いをしていた小さな人達はバタッと話を途絶やして一生懸命に画用紙に向かって何やら描き出したのであった。

そして彼等は何らの躊躇もなく、臆面もなく紙に思うままを描くのであった。」

「児童の心理を成る可く尊重して、然かも誤らない程度に善導し様とするチェツカ教授の生徒たちに対する訓示が如何にも理解あるやり方で然かも夫々興味を与えるものである。それは干渉ではない。注意であり、善導である。放任ではない。所謂自由画という放任教育ではない。教育という意義に於ては常に児童の絵画に対する練習として、鋭い目を自然に放つということも与えている。」<sup>(6)</sup>

どのような訪問であったかは不明だが、この記述から宮下が（たぶん短い訪問であったにもかかわらず）チゼックの教育の本質をつかんでいたことがうかがえる。また、絵画だけでなく図案（切紙細工、リノリュウム彫刻、石版々画）をも例にひき、作品の出来ばえのすばらしさを指摘していることは、著者がかねてより思っていた、チゼックがあんなにも世界的に受け入れられたのは、チゼック・スクールの作品の出来ばえにあることと共通し、興味深く読んだ。

霜田静志の文献は未見であるが、『児童画の心理と教育』の記述や自伝的な「わが思い出」<sup>(9)</sup>によって知ることができる。熊本高工氏が、「日本で一番早くチゼックを紹介したのは霜田静志」<sup>(10)</sup>と指摘するように、霜田によって意図的に初めてチゼックが日本に紹介されたのであろう。「わが思い出」によれば、霜田は1928年のチェコスロバキアのプラハで開かれた第6回国際美術教育会議に岡登貞治、石野孝とともに日本代表として参加し<sup>(11)</sup>、「同志の人々の案内役を承って出かけ」<sup>(12)</sup>、その折りのチゼックの業績との出会いを感動的に述べているが、一方せっかくの収穫も日本にはまだ受け入れる土壌がないことを惜しんでいる<sup>(13)</sup>。

「……私にとっての大きな収穫の一つは、フランツ・チゼックの業績をじかにみることであった。チゼックが児童美術のために貢献した功績がどんなに大きなものかは、戦後久保貞次郎氏らによって紹介され、賞揚され、それによって創造美育運動に大きな拠りどころを得たのであったが、このチゼックのことは二十年も前から私は知っていた。この時期の会議では、チゼックには会えなかったが、彼の弟子の指導ぶりを見、またチゼック指導の児童画作品を見、その出版物を求めて持ち帰ることもできた。そこで帰国後、私はチゼックの業績を紹介、日本の美術教育家たちに、この方面の注意を促したが、当時は殆ど顧みられなかった。私は、余りにも先走りすぎたのであろう。どれもこれも私の開拓したところのものは、二十年、三十年の後に至ってやっと芽を出し、花を開くという有様であった。」

チゼックの業績を正當に評価し、1920～30年にかけて頻繁にスクールを見学し、その成果を自国の美術教育に生かしたアメリカやイギリスに比べ、当時の日本の状況は現在の教育状況を暗示するかのようである。その原因について、『児童画の心理と教育』では、「その頃は山本鼎の自由画論の影響を受けて、子供の図画はもっぱら風景・静物の写生に終始していた状態であったので、チゼックの如きは、私が彼の指導した作品を多くの人々に見せたり、その主張するところを説いたりしたにもかかわらずごく少数の人々がこれに注意を払っただけで殆ど問題にされないで過ぎてしまった」<sup>(14)</sup>と述べている。ともあれこのことから、そしてその後の著述や活動からしても、霜田を日本におけるチゼックの最初の紹介者であり、研究者であると言えるだろう。霜田の文献は年表にあげ

ただけでも七点あり、数の上でも他に抜きんでている。文献から霜田のチゼック観を見ていこう。

創美の児童画研究書の中でも比較的初期に出された『児童画の見方と指導』所収の論文「幼児の絵の指導」は、幼稚園や保育所における幼児画の実際の指導のための理論を特に心理的な面から解説したもので、チゼックは第2章「児童画の研究」の第2節「芸術としての児童画」で触れられており、つまり児童画研究史上の重要な人物と位置づけられているのである。霜田は、チゼック即ち児童画の発見は、19世紀末の印象派以降の美術観（絵画観）の急変と20世紀の児童の発見によってもたらされた児童画への心理学的アプローチによって基礎が作られ、それらが美術（芸術）教育の実践として初めて彼によって成立されたと捉え、チゼックを美術教育の真の意味でのパイオニアであると捉える。

「児童画の芸術的価値は、このように最初は心理学者たちによって認められたのであるが、それを真に実際的な指導の上に活かし、児童の才能を充分発揮せしめるようにして行ったのは、この点に早く目覚めた芸術家や教育家たちであった。ヨーロッパにおいて、この点での先駆者であり、功労者であったものは、ウィーンのアントニー・フォン・チゼック教授であった。

チゼックは当時ウィーンのアート工芸学校の中に、子供のクラスを開いて、七歳から十五歳までの子供を收容し、新しい美術教育を施し、非常な成績をあげた。チゼックの教えた子供たちの作品を、しばしばヨーロッパの各地で展覧されたし、また画集になっても出ているが、子供らしい純真さと、子供独特の表現の美しさは実にすばらしいもので、たちまちこれが評判になった。教育家も美術家も口を極めて賞めるという有様で、これがヨーロッパ世界の美術教育の革新に大きな力となった。」<sup>16)</sup>

また、チゼックの方法を完全な自由教育であるとし、その美術教育は「児童心理に即した新しい導き方である」<sup>16)</sup>と述べ、「心理学者でもない、教育家でもない彼チゼックが、これを発見したことは驚嘆すべきことであるが、ひっきょうこれは、彼の子供を熱愛する心、子供のよさを信ずる心、そこから生まれてきた発見であろう」<sup>17)</sup>と続け、「チゼックの功績は、彼の仕事が学校の図画教育の革新を促すことに役立ち、大きな影響を与えた事実にある」<sup>18)</sup>とまとめている。この文献のチゼックに関する記述は、巻末の注から分かるが、R. R. Tomlinson: *Picture Making by Children*, 1934と同じ著者の *Children as Artists*, 1944（『芸術家としての子供』）のまとめである。

「オーストリアの美術教育」は、日本ユネスコ美術教育連盟編（監修 伊原宇三郎、上野直昭、金森徳次郎、小塚新一郎）『現代世界児童美術全集4 ヨーロッパ3』<sup>19)</sup>に所収される文献であり、各国の児童画作品を載せ、その解説として書かれたものである。他の国がまとめた解説なのに比べ、オーストリアは短文ではあるが、霜田がわざわざ節を設けて書いているということは注目される。内容は、「発達概観」と「芸術としての児童画」の二節に分かれる。前半ではオーストリア美術教育史上のチゼックの位置づけを述べている。オーストリアの図画教育も日本と同様、臨画教育から出発し、写生主義を経て、チゼックのような創造主義に至る。チゼックの美術教育界全体に対する影響は前の文献と変わらないので省略するが、オーストリアにおいて、チゼックの方法を一

